

2021年度 玉川学園中学部 入学試験問題

第1回

国語

- 試験開始まで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 解答はすべて解答用紙に記入下さい。
- 字数制限のある記述問題の解答では、句読点・記号なども一文字分として数えます。

一 次の——線部のカタカナを漢字で答えなさい。また、必要があれば、ひらがなで送りがなも付けて答えなさい。

- ① 図形をカクダイする。
- ② 注文をウケタマワル。
- ③ 深くコキユウする。
- ④ スイチヨクの線を引く。
- ⑤ 機械をソウサする。
- ⑥ センモンカの意見を聞く。
- ⑦ ココロヨイ風がふいていた。

二 次の——線部の読みを、ひらがなで答えなさい。

- ① 参加を募る。
- ② 一日千秋の思いで待つ。
- ③ 干潟を歩く。

三 次の熟語と同じ構成の熟語を、ア、イ、ウ、エ、オの漢字を使って二組作った時に余る漢字を記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|----|-----|----|----|----|----|
| ① | 公私 | ハア来 | イ失 | ウ敗 | エ往 | オ得 |
| ② | 明示 | ハア白 | イ空 | ウ海 | エ青 | オ底 |
| ③ | 平等 | ハア合 | イ豊 | ウ停 | エ集 | オ止 |

四 次の五つの語句を、五十音順にのる国語辞典で調べると、どういう順に出ていますか。早いものから順番に記号を並べて答えなさい。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ① | ア | 徒歩 | イ | 土木 | ウ | 登板 | エ | 土間 | オ | 渡米 |
| ② | ア | 分布 | イ | 文法 | ウ | 粉末 | エ | 分母 | オ | 分配 |

五 ①～⑤の——線部の表現が正しく使われていない文を一つ選び、

記号で答えなさい。

① ア 妹の泣きまねに父はまんまとひっかかった。

イ 先生はいたずらをした生徒にこんこんと説教をした。

ウ 大体いくつくらいあるかみんなでこそつと数えた。

エ 東の方からしらじらと夜が明けていく。

オ 「良くないことは良くない」とびしつと注意をする。

② ア 見学は無料ですので、どうぞご覧ください。

イ まさか横綱が連敗するわけがあるまい。

ウ もし手伝ってくれるのなら、明日来てくれる？

エ めったなことで姉は怒ったりする。

オ きつとその努力はあとで実を結ぶだろう。

③ ア たとえ勝てないとしても、最後まで全力をつくそう。

イ 近くにお寄りの時は、ぜひお声がけください。

ウ 弟の笑顔はまるでヒマワリのようだ。

エ この問題はやさしすぎてまるつきり見当がつく。

オ その場にいなかった人がどうしてそんなことを言えるだろうか。

④ ア 転校先で先生に校舎を案内していただいた。

イ 秋の新メニューを会長がおめし上がりになられた。

ウ (取引先に対して)折り返しこちらから連絡させていただきます。

エ 申し訳ありません。ただいま田中は席を外しております。

オ ぼくは次でも大丈夫なので、どうぞ先にお乗りください。

⑤ ア どんな時でもやっぱり先に立つのはお金だ。

イ 助けてあげたい気持ちはあるけれど、ない袖は振れないよ。

ウ 働き続けた時こそ万事休すだ。

エ 平和条約を結んで、両国の争いの歴史に幕を引いた。

オ 彼の持っている才能は底が知れない。

〔六〕 それぞれの「 」に漢字を一字入れると、慣用句を用いた文になります。ア～オの「 」の中で、共通の漢字が入るものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ① ア 君が言っていることは「 」も葉もないいわさ話だよ。
 イ 彼は「 」を割ったような性格で、裏表のない人物だ。
 ウ 「 」で鼻をくくったような冷たい態度をとられた。
 エ 去年のことをまだ言うなんて、相当「 」に持っているな。
 オ 十年ぶりの同窓会で、思い出話に「 」をさかせた。
- ② ア つい「 」がすべって、よけいな一言を言ってしまった。
 イ 祖母の退院を「 」を長くして待つ。
 ウ 妹は泣き出すともう「 」がつけられない。
 エ 多額の借金で「 」が回らなくなる。
 オ 山田君は「 」が低く、みんなから好かれている。
- ③ ア 彼は有名人と知り合っていることを「 」にかけている。
 イ 舞台では「 」が浮くようなセリフを言うこともある。
 ウ みんなで「 」をそろえて工場建設に反対する。
 エ がんこな父を説得するのは相当「 」が折れる。
 オ しゃべり方が「 」について、どうも好きになれない。

〔七〕 次の各文の——線部について、①は反対の意味を持っている言葉を、②は似ている意味を持っている言葉を語群から選び、記号で答えなさい。

- ① 楽しみにしていた旅行が台風で中止になって、青菜に塩だ。
 ② 蛙の子は蛙だね。しゃべり方がお父さんとそっくりだ。
- 語群 ア たで食う虫も好き好き イ 蛙の面に水
 ウ 果報は寝て待て エ 急がば回れ
 オ 瓜のつるになすびはならぬ

〔八〕 次の——線部は、文の成分の何に当たりますか。語群から選び、それぞれ記号で答えなさい（記号は何度使ってもかまいません）。

- 先週の日曜日、ぼくは伊藤君と① 駅で待ち合わせをして博物館へ行った。見学していると伊藤君が「うわっ、すごいね!」と声を上げたので見てみると、とても大きな化石② だった。どうやら日本で展示されるのは初めてのようだ。半日かけてじっくり見学した。④ そして帰りに図書館へ行って二人でレポート⑤ をまとめた。

語群 ア 主語 イ 述語 ウ 修飾語
 エ 接続語 オ 独立語

【九】 次の【一】～【IV】の文章は平田オリザ氏の『わかりあえないこと
から——コミュニケーション能力とは何か』からぬき出したものです。
それぞれの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【I】
日本でも、「コミュニケーション教育」という言葉が叫ばれて久しい。
昨今はもう、いささかヒステリックなほどに、どこに行ってもコミュニ
ケーションの必要性が喧伝される。

たとえば、企業の人事担当者が新卒採用にあたってもつとも重視した
能力について、二五項目のうちから五項目を選んで回答するという日本
経団連の経年調査では、「コミュニケーション能力」が九年連続でトップ
となっている。

(中略)

企業がこうも強く要求している「コミュニケーション能力」とは、
いったい何だろう？

就活まつただ中の学生たちに聞いてみても、かえってくる答えはまち
まちだ。

「きちんと言見が言えること」

「人の話が聞けること」

「空気を読むこと」

結論から先に言ってしまうえば、いま、企業が求めるコミュニケーション
能力は、完全にダブルバインド(二重拘束)の状態にある。

ダブルバインドとは、簡単に言えば二つの矛盾したコマンド(特に否
定的なコマンド)が強制されている状態を言う。たとえば、「我が社は、
社員の自主性を重んじる」と常日頃言われ、あるいは、何かの案件につ
いて相談に行くと「そんなことも自分で判断できんのか！ いちいち相
談に来るな」と言われながら、いったん事故が起こると、「重要な案件
は、なんでもきちんと上司に報告しろ。なんで相談しなかったんだ」と
怒られる。このような偏ったコミュニケーションが続く状態を、心理学
用語でダブルバインドと呼ぶ。

現在、表向き、企業が新入社員に要求するコミュニケーション能力は、
「グローバル・コミュニケーション・スキル」Ⅱ「異文化理解能力」で
ある。

(中略)

「異文化理解能力」とは、おおよそ以下のようなイメージだろう。

異なる文化、異なる価値観を持った人に対しても、きちんと言自分の主
張を伝えることができる。文化的な背景の違う人の意見も、その背景
*(コンテキスト)を理解し、時間をかけて説得・納得し、妥協点を見い
だすことができる。そして、そのような能力を以て、グローバルな経済
環境でも、存分に力を発揮できる。

まあ、なんと素晴らしい能力であろうか。これを企業が求めることも
当然だろうし、私もまた、大学の教員として、一人でも多く、そのような
学生を育てて社会に送り出したいと願う。

しかし、実は、日本企業は人事採用にあたって、自分たちも気がつか

ないうちに、もう一つの能力を学生たちに求めている。あるいはそのまったく別の能力は、採用にあたってというよりも、その後の社員教育、もしくは現場での職務の中で、無意識に若者たちに要求されてくる。

日本企業の中で求められているもう一つの能力とは、「上司の意図を察して機敏に行動する」「会議の空気を読んで反対意見は言わない」「輪を乱さない」といった日本社会における従来型のコミュニケーション能力だ。

いま就職活動をしている学生たちは、あきらかに、このような矛盾した二つの能力を同時に要求されている。しかも、何より始末に悪いのは、これを要求している側が、その矛盾に気がついていない点だ。ダブルバインドの典型例である。

【Ⅱ】

私たち言語の教育に関わる者は、子どもの表現力をつけるという名目のもと、スピーチだ、ディベートだといろいろな試みを行ってきた。その一つ一つには、それぞれ意味があり、価値があったのだろう。

しかし、そういった「伝える技術」をどれだけ教え込もうとしたところで、「伝えたい」という気持ち^{こころ}が子どもの側にないのなら、その技術は定着していかない。では、その「伝えたい」という気持ちはどこから来るのだろう。私は、それは、「伝わらない」という経験からしか来ないのではないかと思う。

いまの子どもたちには、この「伝わらない」という経験が、決定的に

不足しているのだ。現行のコミュニケーション教育の問題点も、おそらくここに集約される。この問題意識を前提とせずに、しゃかりきになって「表現だ!」「コミュニケーションだ!」と叫んだところで意味はない。

④では、どうすればいいのだろうか?

子どもたちを千尋の谷に落とせと言っているわけではない。

⑤おそらく、一番いいのは体験教育だ。障害者施設や高齢者施設を訪問したり、ボランティアやインターシップ制度を充実させる。あるいは外国人とコミュニケーションをとる機会を格段に増やしていく。とにかく、自分と価値観やライフスタイルの違う「他者」と接触する機会を、シャワーを浴びるように増やしていかなければならない。

ただこれには、予算や人員の制約がある。セキュリティの問題もあって、なかなか子どもたちを簡単に学校の外に出すことはできない。

⑥ここに、演劇、あるいは演劇的な授業の大きな役割がある。

演劇は、常に他者を演じることができる。

⑦実際の体験教育ほどの効果はないかもしれないが、異文化、他者への接触をフィクションの力を借りてシミュレート(疑似体験)することができる。

⑧欧米において、異文化コミュニケーション教育の中核の一つに演劇が位置してきたのも、多くはこの点に依拠すると私は考えている。

⑨そしてもう一点、演劇は、自分を出発点とすることができる。無理に自己を変えるのではなく、自分と、演じるべき役柄の共有できる部分を見つけしていくことによって、世間と折りあいをつける術を、子どもたち

は学んでいく。

【III】

日本ではどうも、「演じる」ということは、「役になりきる」「のりうつる」といったイメージで捉えられがちだ。もちろんそういった憑依系タイプの俳優さんもいることはいる。だが、多くの俳優が、その内面^⑧でしている仕事は、そういったものではないだろうと私は考えている。

俳優の本当の仕事は、「普段私は他人に話しかけないけれども、話しかけるとしたらどんな自分だろうか」と探ることだ。すなわち、俳優という自分の個性と、演じるべき対象の役柄の共有できる部分を捜しだし、それを広げていくという作業が求められている。

実はこういった考え方は、教育学の世界でも注目を集めている。これを通常、「シンパシーからエンパシーへ」と呼ぶ。エンパシーという英語は翻訳が難しいのだが、私は「同情から共感へ」「同一性から共有性へ」と呼んでいる。

この事象のもっともわかりやすい例は、いじめのロールプレイだ。いま小中学校の総合的な学習の時間などで、いじめに関するロールプレイがよく行われている。いじめる側、いじめられる側を、交互に演じてみようという試みだ。こういった場面でも、経験の浅い教員ほど、「ほら、いじめられた子の気持ちになってごらん」と子どもたちに声をかける。だが、少し考えてもらえばわかると思うのだが、いじめられた子どももの気持ち^⑨がすぐにわかるのなら、おそらく、いじめはあまり起こらない。

いじめられた子どもの気持ちは、簡単にはわからない。

しかし、いじめっ子の側にも、他人から何かをされて嫌だった経験はあるだろう。その二つの気持ちを、「それは似たものなんだよ」と結びつけてあげるのが、本来のロールプレイの意味あいなのだ。

シンパシーからエンパシーへ。同情から共感へ。これはいま、他の分野でも切実な問題となっている。

医療や福祉や教育の現場で、多くの有為の若者たちが、「患者さんの気持ち^⑩がわからない」「障害を持った人たちの気持ちが理解できない」と絶望感にうちひしがれて、この世界を去っていく。真面目な子ほど、そのような傾向が強い。

患者さんや障害者の気持ちに同一化することは難しい。同情などは、もつてのほかだ。しかし、患者の痛みを、障害者の苦しみや寂しさを、何らかの形で共有することはできるはずだ。私たち一人ひとりの中にも、それに近い痛みや苦しみがきつとあるはずだから。

こういったエンパシー型の教育には、演劇的な手法が大きな効果を示す。なぜなら演劇は元来、異なるコンテキストを抱えた人間が集まって、一定期間内に何かをアウトプットするという営みを繰り返してきたから。

ここで重要なのは、実は「一定期間内に」という点だ。^⑩おおよそ、どんな共同体でも、このようなコンテキストの摺りあわせを、長い時間をかけて行う。五〇年、一〇〇年とかかって、企業や学校の中だけで通じる言葉や、その地域の中だけで通じる方言などが生まれてくる。

(中略)

しかし演劇においては、ただか数週間のけい古を経ただけで、あたかも家族のように、あたかも恋人同士のように、「a」よく知っている劇団員同士でも、あたかも他人のように振る舞うことができる。

私たち演劇人は、ごく短い時間の中で、表面的ではあるかもしれないが、他者とコンテキストを摺りあわせ、イメージを共有することができる。そこに演劇の本質がある。

「b」、このノウハウ、このスキルは、これからのエンパシー型の教育に大きな力を発揮するだろうと私は考えている。ここで言うエンパシーとは、「わかりあえないこと」を前提に、わかりあえる部分を探っていく営みと言い換えてもいい。

【IV】

人びとはバラバラなままで生きていく。価値観は多様化する。ライフスタイルは様々になる。それは悪いことではないだろう。日本人はこれからどんどんと、バラバラになっていく。

「c」、人間は社会的な生き物なので、バラバラだけでは生きていけない。私たちはどうしても、社会生活を営んでいくうえで、地域社会で決めていかなくてはならないことがある。

いままでは、少なくとも一九八〇年代までは、遠くで(霞ヶ関で)、誰かが(官僚が)決めてくれていたことに、何となく従っていれば、いろいろ小さな不都合はあったとしても、だいたい、みんなが幸せになれる

社会だった。しかし、いまは、自分たちで自分たちの地域のことについて判断をし、責任を持たなければならぬ。その判断を誤ると、夕張市のように自治体でさえも潰れる時代が来てしまったのだ。

ただ、この一点が変わったために、日本人に要求されているコミュニケーション能力の質が、いま、大きく変わりつつあるのだと思う。いままでは、遠くで誰かが決めていて、何を何となく理解する能力、空気を読むといった能力、あるいは集団論でいえば「心を一つに」「一致団結」といった「価値観を一つにする方向のコミュニケーション能力」が求められてきた。

しかし、もう日本人はバラバラなのだ。

「d」、日本のこの狭い国土に住むのは、決して日本文化を前提とした人びとだけではない。

だから、この新しい時代には、「バラバラな人間が、価値観はバラバラなままで、どうにかしてうまくやっていく能力」が求められている。

私はこれを、「協調性から社交性へ」と呼んできた。

「平田君は、自分の好きなことは一生懸命、集中して頑張るけれども、どうも協調性に欠けるようです」と小学校一年生から通信簿に書かれてきたような人間が、作家や芸術家になる。私自身、自分の好きなことしかやってこなかったし、協調性はないものと自覚している。

しかし、演劇は集団で行う芸術なので、演劇人には「社交性」はあるのだ。私たちは、幕が下りるまではどんな嫌な奴とでも、どうにかして仲良くする。プロの世界などはひどいもので、舞台上では、「あなたが

なければ死んでしまうわ」と言っている。楽屋に帰ればそっぽを向いている連中もたくさんいる。それでいい舞台ができるのなら、私としてはまったくかまわない。これもまた「社交性」だ。

しかしこの社交性という概念は、これまでの日本社会では「上辺だけのつきあい」「表面上の交際」といったマイナスのイメージがつきまとった。私たちは、「心からわかりあう関係を作りなさい」「心からわかりあえなければコミュニケーションではない」と教え育てられてきた。

⑫ しかしもう日本人は心からわかりあえないのだ……と言ってしまうと身もふたもないので、たとえば高校生たちには、私は次のように伝えることにしている。

「心からわかりあえないんだよ、すぐには」

「心からわかりあえないんだよ、初めからは」

この点が、いま日本人が直面しているコミュニケーション観の大きな転換の本質だろうと私は考えている。

心からわかりあえることを前提とし、最終目標としてコミュニケーションというものを考えるのか、「いやいや人間はわかりあえない。でもわかりあえない人間同士が、どうにかして共有できる部分を見つけて、それを広げていくことならできるかもしれない」と考えるのか。

「心からわかりあえなければコミュニケーションではない」という言葉は、耳に心地よいけれど、そこには、心からわかりあう可能性のない人びとをあらかじめ排除するシマ国・ムラ社会の論理が働いてはいないだろうか。

実際に、私たちは、パレスチナの子どもたちの気持ちはわからない。アフガニスタンの人びとの気持ちもわからない。

しかし、わからないから放っておいていいというわけではないだろう。価値観や文化的な背景の違う人びとも、どうにかして共有できる部分を見つけて、最悪の事態である戦争やテロを回避するのが外交であり国際関係だ。

好むと好まざるとにかかわらず、国際化する社会を生きていかなければならない日本の子どもたちに、より必要な能力はどちらだろう。もちろん協調性がなくていいとは言わないが、日本の子どもたちは世界基準から見れば、まだまだ集団性は強い方だ。ならばプラスαの能力として、
⑬ これからの教育が子どもたちに授けていかなければならないのは、この「社交性」の方なのではないか。

（『わかりあえないことから——コミュニケーション能力とは何か』
平田オリザ〈講談社〉による）

〈注〉

- * 喧伝……………盛んに言いはやして世間に広く知らせること。
- * 矛盾……………つじつまの合わないこと。
- * コマンド……………命令。指令。
- * コンテキスト……………文脈のこと。ここではその人がどんな意味でその言葉を使っているかということ。
- * 依拠……………よりどころとすること。
- * 憑依……………霊れいなどが乗り移ること。
- * ロールプレイ……………場面を想定し、様々な役割を演じさせて問題点や解決法を考えさせる学習法。
- * 有為……………役に立つこと。才能のあること。
- * アウトプット……………出力。生み出すこと。発信すること。
- * スキル……………技術。

(1) ——— 線部①の「ダブルバインド（二重拘束）の状態」を別の言葉

で言いかえると、どのような状態と言えますか。【I】の文中から二十文字以内でぬき出しなさい。

(2) ——— 線部②「そのような学生」とはどのような学生ですか。十文

字以上二十文字以内で答えなさい。

(3) ——— 線部③「これ」とは何ですか。【I】の文中から九文字でぬ

き出しなさい。

(4) ——— 線部④「ここに集約される」とありますが、何に集約される

のですか。【II】の文中の言葉を使って、二十文字以上三十文字以内で答えなさい。

(5) — 線部⑤の答えを次のようにまとめました。A、Bに当てはまる言葉を、それぞれの文字数にしたがって【Ⅱ】の文中からぬき出しなさい。

A(四文字)を通して、B(十一文字)をもっと増やすべきだ。

(6) — 線部⑥「大きな役割」とありますが、子どもたちは演劇(的な授業)によって何を学ぶことができると筆者は考えていますか。【Ⅱ】の文中から十二文字でぬき出しなさい。

(7) — 線部⑦の例が【Ⅲ】で取り上げられていますが、それは何ですか。十文字でぬき出しなさい。

(8) — 線部⑧で筆者は「その内面でしている仕事」はどのようなことをするべきだと考えていますか。に入る言葉を【Ⅲ】の文中から四十文字以上四十五文字以内で探し、その最初と最後の五文字をぬき出しなさい。

こと。

(9) — 線部⑨の土台になっていることは何ですか。次の中から当てはまるものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア 相手の気持ちに寄り添い、つらいとか苦しいとか同情の気持ちを
持つこと。

イ わかりあえないことを前提とし、そこからわかりあえるところを
探していくこと。

ウ 出来るだけ時間をかけて、あせらずにゆっくり相手のことを考え
ていくこと。

エ 患者さんや障害者の気持ちに同一化すること。

オ 相手と気持ちを共有し、共感できることを見つけていくこと。

(10) — 線部⑩をもとに考える演劇の利点を次のようにまとめるとき、【Ⅲ】の文中からぬき出しなさい。

実社会では、コンテキストの摺りあわせはA(四文字)をかけて行われる。しかし、演劇ではB(六文字)の中でC(二文字)とコンテキストを摺りあわせて、D(四文字)を共有できるところに利点がある。

(11) 「 a 」 「 d 」 に当てはまる言葉の組み合わせのうちで、正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ア | a | または | b | だが | c | ところで | d | さて |
| イ | a | ときに | b | けれども | c | だから | d | たとえば |
| ウ | a | あるいは | b | そして | c | しかし | d | さらに |
| エ | a | もしくは | b | また | c | だから | d | しかも |
| オ | a | さて | b | だから | c | だが | d | しかも |

(12) 線部⑩と置きかえられる三文字の言葉を、【Ⅳ】の文中からぬき出さない。

(13) 線部⑫でなぜ筆者はそのように考えているのですか。その理由を三十文字以上四十文字以内で答えなさい。

(14) 線部⑬のように筆者が考える理由を、次のようにまとめました。

【Ⅳ】の文中からぬき出さない。

【Ⅳ】の文中からぬき出さない。

これから【A】(七文字)【B】(三文字)【C】(六文字)【D】(七文字)【E】(五文字)を身にかけていくためには、【E】(五文字)【D】(七文字)【C】(六文字)【B】(三文字)【A】(七文字)の違う人びども、どうにかして【E】(五文字)【D】(七文字)【C】(六文字)【B】(三文字)【A】(七文字)を見つけて、それを【E】(五文字)【D】(七文字)【C】(六文字)【B】(三文字)【A】(七文字)を身にかけていくことが、日本の子どもたちには必要だから。

(15) 【Ⅰ】「Ⅳ」の文章について次のようにまとめました。

筆者はコミュニケーション能力を身に付ける上で重要な役割を果たすものは【A】だと考えており、それによって【B】の感覚が磨かれ、他者を理解する能力が高められると考えている。

【Ⅰ】【A】に当てはまる言葉を全文章中から見つけ、二文字でぬき出さない。

【Ⅱ】【B】に当てはまる言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|---------|---|---------|
| ア | 共有性と協調性 | イ | 同一性と多様性 |
| ウ | 同一性と社交性 | エ | 共有性と社交性 |
| オ | 協調性と集団性 | | |

(16) 本文の内容にふさわしいものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア 現在の日本企業は人材採用や現場で、無意識に二種類のコミュニケーション能力を要求している。

イ 筆者は、子どもたちの「伝えたい」という気持ちはスピーチやディベートによって育成されると考えている。

ウ 演劇は常に他者を演じることができると考えているが、筆者は演劇的な手法に教育上重要な要素はほばないと考えている。

エ 医療や福祉の現場で演劇的な手法を用いることによって、患者さんや障害者の気持ちに同一化することが可能になる。

オ 筆者は、シンパシー型の教育や協調性を重視する今までの姿勢では、今後太刀打ちできないと考えている。

カ 筆者は、今まで通り心からわかりあえることを前提として、コミュニケーション能力を高めていくことが大事だと考えている。

キ 社交性という概念には、「上辺だけのつきあい」というマイナスイメージがあり、筆者も重要視していない。